

## インドネシア語

降幡 正志

インドネシア語の他動詞文は、主語が動作主 (agent) の場合、述語内の動詞は接頭辞 *meN-* を用いた形をとる。主語が動作対象 (patient) の場合、動作主が1人称・2人称であれば接頭辞を伴わない他動詞が人称詞の直後に続いて1つのフレーズを構成し、動作主が3人称であれば接頭辞 *di-* を付した他動詞を用い、動作主を明示する際にはその *di-* 派生語の直後に述べるか、前置詞 *oleh* を用いる。これらの典型的な文型については、後述の (7) a-c. を参照されたい。

インドネシア語の「受動表現」というと、接頭辞 *meN-* と接頭辞 *di-* との対立において論じられることが多い。それらの中では *meN-* 派生語を用いる他動詞文を能動文 (*kalimat aktif*)、*di-* 派生語を用いれば受動文 (*kalimat pasif*) と呼ばれる。さらに、「完了」「自発」「可能」「無意識」などの意を併せ持つ接頭辞 *ter-* やいわゆる「迷感受身」を表すとする共接辞 *ke--an* なども受動表現に含めて論じられることがある。<sup>1</sup> 一方、接頭辞 *di-* を用いた他動詞文を受動態と見なさない立場もある。<sup>2</sup>

本稿では、受動態と認めるか否かの議論には立ち入らず、アンケートに提示された日本語文に対応した例文を挙げ、解説を加えていく。

### (7) A は B に叩かれた (直接受身)

- a. Budi pernah dipukul (oleh) Iwan.

ブディ 《経験》 di-殴る (～に) イワン<sup>3</sup>

「ブディはイワンに殴られたことがある」

- b. Budi pernah saya pukul.

ブディ 《経験》 私 Ø-殴る

<sup>1</sup> 湯浅(2004)は、*di-*、*ter-*、*ke--an* の3種の受動表現をそれぞれ「直接受け身」「自発的受け身」「第三者の受け身(迷感受け身)」と説明し、それらを‘Volitionality’と‘Responsibility’の有無という観点から論じている。

<sup>2</sup> 崎山(1974:46-69)、佐々木(1982,1995)を参照。

<sup>3</sup> 語句説明における *meN-* や *di-* は、これらの接頭辞を伴う他動詞であることを、Ø- は接頭辞を伴わない他動詞であることを示す。また《》は助動詞であることを示す。

「ブディは私が殴ったことがある」

c. Iwan memukul Budi.

イワン meN-殴る ブディ

「イワンはブディを殴った」

(ア)a.では、他動詞「殴る」の接頭辞 di- を伴う形（以下：di- 形）が用いられていることで主語（Budi）が「殴る」という動作の対象であることがわかる。この文の動作主は、前置詞などのマーカーを伴わず動詞の直後に続ける（dipukul Iwan）ことも、前置詞 oleh を用いて表示する（dipukul oleh Iwan）ことも可能である。

(ア)b.は、動作主が1人称・2人称の場合には、その動作主に接辞を伴わない他動詞の語形（以下：ゼロ形）が不可分の関係で続いている。これにより主語（Budi）が動作対象であることがわかる。<sup>4</sup>

これらに対し、(ア)c.は主語（Iwan）が動作主である。動作主が主語となる場合は、人称に関係なく他動詞は接頭辞 meN- を伴う形（以下：meN- 形）となる。

(イ) A は B に足を踏まれた（持ち主の受身、体の部分）

a. Kaki Budi diinjak (oleh) Iwan.

足 ブディ di-踏む (～に) イワン

「ブディの足はイワンに踏まれた」

b. Iwan menginjak kaki Budi.

イワン meN-踏む 足 ブディ

「イワンはブディの足を踏んだ」

c. Budi diinjak kakinya oleh Iwan.

ブディ di-踏む 足-その ～に イワン

「ブディは足をイワンに踏まれた」

(イ)a.は踏む対象物そのもの、すなわち kaki Budi「ブディの足」が主語となっている。(イ)b.は、(イ)a.に対応した、動作主を主語とする文である。menginjak/diinjak「踏む」は、基本的には対象物そのもの（この場合は kaki「足」）が文法的に対応すると考えられる。しかし実際には、(イ)c.のように、踏まれる直接の対象物を補足的に述べる表現もみら

<sup>4</sup> 動作主とゼロ形が不可分の関係にあるため、助動詞を用いる場合にはその前に述べることになる。

れる。この場合、補足的に述べる語には *-nya* 「彼(女)の、その」が必須となる。

d. *Kaki Budi terinjak oleh Iwan.*

足 ブディ 踏まれる ～に イワン

「ブディの足はイワンに踏まれた」

e. *Budi terinjak kakinya oleh Iwan.*

ブディ 踏まれる 足-その ～に イワン

「ブディは足をイワンに踏まれた」

(i)d.と(i)e.はそれぞれ (i)a.と(i)c.の *diinjak* が *terinjak* に置き換わっている。接頭辞 *ter-* は、そのひとつの働きとして「つい(うっかりと)～してしまう」という、いわゆる「無意識の動作」を表す派生語を形成する。なお、このような *ter-* 派生語は一般的に、動作主を明示する際に前置詞 *oleh* を必要とする。

(ウ) A は B に財布を盗まれた(持ち主の受身, 持ち物)

a. *Budi kecurian dompet.*

ブディ 盗まれる 財布

「ブディは財布を盗まれた」

*kecurian* は基語 *curi* に 共接辞 *ke--an* を伴っている。共接辞 *ke--an* の機能のひとつに、いわゆる「迷惑受身」を形成するというものがある。対応する主語は *ke--an* 派生語の基語に関わる迷惑(あるいは影響)を被る主体であり、語によってそのプロセスに関わる事物を補語として直後に続ける。(ウ)a.の場合は、盗まれる主体である *Budi* が主語になり、盗まれた物(*dompet*「財布」)が *kecurian* の後に補語として続いている。「盗まれる物」を主語とする文については、(キ)で扱う。

b. *Hidung Budi kemasukan air.*

鼻 ブディ 入ってしまう 水

「ブディの鼻は水が入ってしまった」

(ウ)b.の *kemasukan* 「入ってしまう」は、*masuk* 「入る」を基語とする。*masuk* には

他に termasuk 「含まれる」という ter- 派生語も存在する。(ウ)b.では体の部分が主語となり、パラレルに比較できないが、ter- 派生語と ke--an 派生語が必ずしも単純に「体の部分」「持ち物」という区別で用いられるわけではない。

(エ) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった。

(自動詞からの間接受身)

a. Tadi malam anak saya menangis. Jadi saya tidak bisa tidur.

昨日の夜 子供 私 泣く それで 私 ~ない 《可能》 寝る

「昨日の夜、私の子どもが泣いた。それで私は眠れなかった」

b. Budi kematian ayah.

ブディ 死なれる 父

「ブディは父親に死なれた」

c. Saya ketinggalan kereta.

私 取り残される 汽車

「私は汽車に乗り遅れた」

menangis 「泣く」は、tangis を基語とするが、「泣かれる」という意を持つ派生語がない。そのため「私は(…に)泣かれた」という表現を直接に述べることができず、(エ)a.のように「泣いた」としか言えないようである。ただしこれは語彙的な理由によるもので、(エ)b.にみられる kematian 「死なれる」(mati 「死ぬ」)のような自動詞の ke--an 派生語も存在する。一方(エ)c.の ketinggalan 「取り残される」(tinggal 「残る、とどまる、住む」)は、主語 saya 「私」が「残る」ことで迷惑を被ることを表している。

(オ) 新しいビルが(Aによって)建てられた。(モノ主語受身、一回的)

a. Gedung baru dibangun (oleh) mereka.

ビル 新しい di-建設する (~に) 彼ら

「新しいビルが彼らによって建てられた」

b. Gedung baru itu sudah dibangun.

ビル 新しい それ 《完了》 di-建設する

「その新しいビルがすでに建てられた」

c. Mereka membangun gedung baru.

彼ら meN-建設する ビル 新しい

「彼らは新しいビルを建てた」

(\*)a. (\*)b. は di- 派生語を述語として動作対象を主語とする文である。一回的か恒常的に関わらず、動作対象を主語とする文は一般的に di- 派生語を用いる。なお, (\*)c. は (\*)a. に対応する、動作主を主語とする文である。

(カ) カナダではフランス語が話されている。

(モノ主語受身, 恒常的, 動作主が問題にならない場合)

a. Bahasa Prancis juga digunakan di Kanada.

言語 フランス ~も di-使う ~で カナダ

「カナダではフランス語も用いられている」

b. Di Kanada orang menggunakan juga bahasa Prancis.

~で カナダ 人 meN-使う ~も 言語 フランス

「カナダでは人々はフランス語も用いている」

(\*)で述べたように、一回的か恒常的に関わらず、動作対象を主語とする文は一般的に di- 派生語を用いる。(カ)b.のように、動作主として orang「人」を不特定の主語とする文も見受けられるが、さほど一般的であるとは言い難い。

(キ) 財布が (A に) 盗まれた。

(モノ主語受身, モノ主語の背後に被影響者が想定される)

a. Dompét Budi dicuri (oleh) Iwan.

財布 ブディ di-盗む (~に) イワン

「財布がイワンに盗まれた」

b. Dompétnya dicuri (oleh) Iwan.

財布-彼(女)の di-盗む (~に) イワン

「財布がイワンに盗まれた」

c. Iwan mencuri dompét Budi.

イワン meN-盗む 財布 ブディ

「イワンはブディの財布を盗んだ」

盗む対象物 (ここでは dompét「財布」) が主語であれば、述語に di- 派生語を用い

る。「盗む」ということで被害を受ける主体が主語の場合には (ウ) で述べたように kecurian を用いる。(キ)b. の -nya は、文脈上の特定の人物を指して「彼(女)の」の意と解釈されるが、話し手・聞き手双方の了解に基づく特定の事物について「その・例の」といった用法もある。なお、(キ)c. は (キ)a. に対応する、動作主を主語とする文である。

(ク) 壁に絵が掛けられている (モノ主語受身, 結果状態の叙述)

a. Sebuah gambar tergantung di dinding.

1つ 絵 掛けられている ~に 壁

「一枚の絵が壁に掛かっている」

b. Sebuah gambar digantung di dinding.

1つ 絵 di-掛ける ~に 壁

「一枚の絵が壁に掛けられている」

接頭辞 ter- の機能のひとつとして“完了”を示す派生語の形成がある。(ク)a. の tergantung 「掛かっている」は、「掛ける」という動作の結果状態を述べる。一方 (ク)b. のように基語を同じくする di- 派生語を用いると、「(誰かが) 掛ける/掛けた」という動作そのものに着目するといえる。

(ケ) A は B に / から愛されている。

(感情述語の受身, 特に動作主のマーカ―に注目)

a. Budi dicintai (oleh) ibunya.

ブディ di-愛する (~に) 母-彼(女)の

「ブディは母親に愛されている」

b. Budi sangat mencintai Dina.

ブディ とても meN-愛する ディナ

「ブディはディナをととても愛している」

(ケ)a. も、これまで述べてきたように di- 派生語が用いられており、その動作主の表示のしかたも (ア) などと同様に di- 派生語の直後に続けるか、前置詞 oleh を伴う。このような構造は、感情述語であるかどうかで変わることはない。なお (ケ)b. は (ケ)a. に対応する、動作主を主語とする文である。

(コ) A は B に／から「…」と言われた。

(伝達動詞の受身, 特に動作主のマーカ―に注目)

a. Dikatakan (oleh) Iwan bahwa ....

di-言う (～に) イワン …ということ

「…ということがイワンに言われた」

b. Iwan mengatakan kepada Budi bahwa ....

イワン meN-言う ～へ ブディ …ということ

「ブディはイワンに…と言った」

c. Budi dikatakan (oleh) Iwan bahwa ....

ブディ di-言う (～に) イワン …ということ

「ブディはイワンに…と言われた」

mengatakan/dikatakan は, 基本的に「言う」内容を直接の動作対象とする他動詞である。(コ)a.は述語―主語の語順で, 言う内容である bahwa 以下が主語であると考ええる。動作主を主語とする (コ)b.を見ると, 言う相手 (Budi) を述べる際に前置詞 kepada 「～へ」を用いている。しかし dikatakan の実際の用法を見ると, (コ)c.のように言う相手を主語とするような文もしばしば見受けられる。

#### 参考文献

崎山理. 1974. 『南島語研究の諸問題』. 弘文堂.

佐々木重次. 1982. 「インドネシア語における態の問題」, 『講座日本語学 10 外国語との対照 I』. 明治書院. 292-304.

佐々木重次. 1995. 「能動論者として」, 『インドネシア 言語と文化』第 1 号. 日本インドネシア学会. 91-95.

湯浅章子. 2004. 「‘Volitionality’ と ‘Responsibility’ ―インドネシア語における 3 種の受動表現 ‘di-’ ‘ter-’ ‘ke-an’」, 『甲南女子大学研究紀要文学・文化編』第 40 号. 85-91.